

# ある共同作業の痕跡

## — *Household Words* から読むギヤスケル —

加藤 匠

### 1 雑誌内のコンテキスト

1850年、『ハウスホールド・ワーズ』誌から遅れること三ヶ月ほどしてアメリカで刊行された『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』誌の第一巻に掲載されたのは、ディケンズによる新作「リジー・リー」であった。この作品の作者がギヤスケルであると知っているわれわれから見れば、これは誤解の余地もないほど大きな誤植に他ならない。しかし当時の読者からすれば、この表記を誤りであると断定することはできなかったはずである。当代きっての人気作家であったディケンズ自らが指揮すると謳われた『ハウスホールド・ワーズ』誌の創刊号においては、刊行の辞の直後、すなわち実質的には創刊号の冒頭に「リジー・リー」が掲載されており、著者名が明記されていない以上、この作品をディケンズが書き下ろしたものだと思える方がむしろ妥当な判断だったと思われるからだ。当時は著作権がイギリスとアメリカの間で未整備だったことからすれば、このような誤解が起こる余地は充分にあったということである。そのような誤解が起こりうる可能性をもった位置に「リジー・リー」を掲載したということは、ディケンズがギヤスケルをいかに高く評価していたかを何よりも雄弁に物語っている。

このような雑誌掲載を初出とする作品が数多く出現した背景として、19世紀なかばから雑誌の刊行が相次いだことが挙げられるだろう (Jones 372)。こうした変化に伴って、文学作品の読まれ方そのものも変化を遂げることとなった。現在、われわれが全集版や個別の本として完成したものを読むことと対応する、ひとつの作品を連続して読むやり方が存続したことは改めて言及するまでもないが、ある作品を周囲にある記事や他の作品と関連づける読み方が生まれてきたのである。こうした読み方には、同一号に掲載された周辺

の記事との間だけでなく、連続もしくはある一定の期間を置いて掲載された記事の間に読者が何らかの連関を見いだすことも含まれるだろう。こうした研究がこれまで盲点となってきたことは否定できまい。Hughes と Lund はギaskell作品の初出雑誌に戻って考察を試みてはいるものの、その周辺の記事との関連で捉えようとはしなかった。

ある読者があるテキストからどのような解釈を作り出すかは、そのテキストと他のテキストとの関係をどう認識するかによって決まる以上、雑誌内部のインターテキスト性を踏まえて、作品を改めて位置づけることができるはずである。換言するならば、全集版を読んでいる限り前景化することのない、個々の作品が発表された雑誌というコンテキストに回帰することで、当時の読者が作品をどう読みうる可能性があったのかを探る試みということだ。たとえば『克蘭フォード』が『ハウスホールド・ワーズ』誌を初出としており、最初に掲載された1851年12月13日号から結末を迎えた1853年5月21日号まで、約一年半にわたって断続的に掲載されたという背景を踏まえられない限り、解釈に困難を伴うだろう。<sup>1</sup> 雑誌に掲載されたものが全集に収録されることで、見えにくくなってしまいう要素が確かにあるのだ。

ディケンズほど構成にこだわり、有機的な作品世界を構築することのできた作家が、自ら指揮する雑誌が構築する言説空間に無関心であったはずはない<sup>2</sup>。『ハウスホールド・ワーズ』誌上において、編集長ディケンズが作家ギaskellをどのようなコンテキストに位置づけようとしていたのかを確認することで、父権的な編集長ディケンズと犠牲者たる女性作家ギaskellという、ジェンダー批評の枠組を軸として分析されることが多かった両者の関係とは別の側面が見えてくるはずである。<sup>3</sup>

## 2 『ハウスホールド・ワーズ』誌と編集長ディケンズ

ギaskell作品がいかなるコンテキストのもとに置かれたのかを確認するために、同誌がいかなる言説空間を構築していたのか確認しておこう。『ハウスホールド・ワーズ』誌はディケンズ作品に親しんでいる中流階級の人々を主な読者層とした雑誌であり、刊行当初は十万部、平均して四万部の売り上げを誇り、クリスマス号は約十二万部もの売り上げを誇っていた (Altick 347;

Sutherland 308)。『パンチ』誌の売り上げが四万部であったことを念頭に置くならば、相当広く読まれていたと結論づけることもできるだろう。もっとも当時の文化状況からすれば、実際には売り上げ部数以上の人々がこの雑誌の記事に触れることができたとみて間違いない。編集長ディケンズの意図が明確なかたちで浮上するのは、創刊号の冒頭に置かれた刊行の辞においてである。

We aspire to live in the Household affections, and to be numbered among the Household thoughts, of our readers. We hope to be the comrade and friend of many thousands of people, of both sexes, and of all ages and conditions, on whose faces we may never look. We seek to bring into innumerable homes, from the stirring world around us, the knowledge of many social wonders, good and evil, that are not calculated to render any of us less ardently persevering in ourselves, less tolerant of one another, less faithful in the progress of mankind, less thankful for the privilege of living in this summerdawn of time [ . . . ].

To show to all, that in all familiar things, even in those which are repellent on the surface, there is Romance enough, if we will find it out [ . . . ] is one main object of our Household Words. (I, 1)

ここから、自分たちの生活を取り巻く公衆衛生、貧困、工場労働をめぐる問題から国外の動きに至る時事問題に至るまでの諸問題を取り上げようという姿勢とともに、決して従来は前景化することがなかった側面——これを通して、何らかのモラルが提示されることとなる——にも目を向けていこうとする姿勢が表明されることとなる。こうした編集方針が掲載されたあらゆる記事に適用されることからすれば、掲載された記事の多くは何らかの形でこうした社会問題を取り込み、読者を楽ませるような口当たりの良いものにしながらかのモラルを提示するという、ディケンズ自身の作品を彷彿とさせるものとなったということである。

ギャスケルの作品もこうしたコンテキストの下に置かれたのだが、具体的

にどのような形で絡み合うこととなったのだろうか。ギヤスケル作品が内包するテーマにディケンズがいかに反応し、誌面を通じていかに前景化させたのかを論じるためには、ギヤスケル作品が掲載された前後の『ハウスホールド・ワーズ』誌においていかなる記事が掲載されていたかということと、ディケンズがギヤスケル作品を掲載した号をいかに構成していたかを共に分析する必要があるはずである。

### 3 ギヤスケル作品をめぐるインターテキスト

『ハウスホールド・ワーズ』誌というコンテキストからギヤスケルの作品を位置づける試みとして、まずはギヤスケルの作品が掲載された前後の号でどのような記事が掲載されていたのかを確認することにしよう。ある一定の期間において共通の話題が扱われた場合、読者がそれらの記事の間を何らかの連想を通じて結びつける可能性がある以上、その可能性を黙殺することはできない。雑誌の編集に携わるものが、そうした可能性を認識していなかったということとはありえないことだからだ。ギヤスケルが描きだした見解がディケンズのもとの絡まりあうことで、『ハウスホールド・ワーズ』誌というひとつの言説空間が作り上げられていたのだから、ギヤスケル作品をそうした言説空間のなかの連関性を踏まえて読む姿勢が求められることになるはずである。

1851年6月7日号に掲載された「失踪」は、表面上は取るに足らないいくつかの失踪事件が紹介されているに過ぎない記事であり、現在最も入手しやすいペンギン版 *Gothic Tales* の冒頭というコンテキストからすれば、位置づけしにくい作品であることは確かだろう。しかしこの作品を単独で読むのではなく、直後の号に掲載された“On Duty with Inspector Field”という、ディケンズが書いた警察制度に対する礼賛記事と結びつけて読むことで、一見したところ繋がりのない「失踪」との間に、警察制度に対する賞賛という連関がもたらされることになるのだ。

[...] I thought that there could be no more romances written on the same kind of plot as Caleb Williams; [...] Now, in 1851, the offended master would set the Detective Police to work; there would be no doubt as to their success; the

only question would be as to the time that would elapse before the hiding-place could be detected, and that could not be a question long. It is no longer a struggle between man and man, but between a vast organised machinery, and a weak, solitary individual; we have no hopes, no fears – only certainty. (III, 247)

In all, Inspector Field is received with warmth. Coiners and smashers droop before him; pickpockets defer to him; the gentle sex (not very gentle here) smile upon him [. . .]. Before the power of the law, the power of superior sense - for common thieves are fools beside these men – and the power of a perfect mastery of their character, the garrison of Rats' Castle and the adjacent Fortresses make but a skulking show indeed when reviewed by Inspector Field. (III, 267)

ギヤスケルは『ケイリブ・ウィリアムズ』に言及しながら警察制度への信頼を表明し、ディケンズは警察制度を体現する人物としてフィールド警部——後に『荒涼館』のバケットのモデルとしたことから (Collins 206-11)、彼への敬意が窺える——を表象しているという点で差異が認められるものの、読者に警察制度への敬意と信頼を抱かせるという両者の目的は共通するものである。共通の見解が表明されたふたつの記事が一週間という短い期間に連続して読まれることによって、警察制度に対して読者が信頼を抱く可能性はより高くなるだろう。そうした効果を計算した上で、ディケンズは記事を配置していたのである。

ギヤスケルの異なる複数の作品が『ハウスホールド・ワーズ』誌に連続して掲載される場合、単に筆者が同じであることに留まらない連関がもたらされた事例もある。1853年12月10日号に掲載された「ユグノーの物語」の主題となっているのは、フランスを舞台に展開されたユグノー虐待についてであった。「呪われた種族」や『メアリー・バートン』をはじめ、虐げられた人々への共感を作品という形で結晶化させてきたギヤスケルだけに、作品中では、娘を迫害から守ろうと必死でイングランドに送り届けたルフェーブルの挿話、拷問を受けても信仰を捨てず、不具の身となってもイングランドに渡って妻と再会した男の挿話が取り上げられており、彼らへの同情からこの話題を扱ったと解釈することもできる

かもしれない。イングランド亡命後のユグノーの生活については“Though far away from France, though cast off by her a hundred years before, the gentle old ladies, who had lived all their lives in London, considered France as their country, and England as a strange land.” (VIII, 353) と述べられているが、この直後の12月17、24日号に掲載された「フランス語の先生」に描かれた、フランス革命を避けてイングランドへと逃れてきた de Chalabre を読んだ際に、読者がこうした表象を思い出して連関性をもたせた可能性は否定できない。イングランドでフランス語教師となって文法書を出版し、イングランド人と結婚までしながら、フランスというナショナリティにこだわりを見せる男の姿は、フランスからイングランドに逃れた亡命者という点で共通項をもつユグノーたちと重ね合わされる形で、読者の意識において、たとえそれがギャスケルによる何らかの偏見を伴うものであろうとも、フランスというナショナリティをめぐるあるイメージが形成されることになるだろう。ディケンズによる作品配置は、そのような可能性を強く示唆するものなのだ。

『クランフォード』においても、インドから帰国するピーター・ジェンキンスをめぐる同様の連関性を見いだすことができる。彼は父親との衝突が原因で家出し、インドに行ったまま行方不明になったとされている人物である。ラマ教の高僧になったという噂は、『クランフォード』を一冊の完成された作品として読む限り、あまりに唐突という感を受けるかもしれない。だが、『ハウスホールド・ワーズ』誌というコンテクストから考えるならば、当時の読者が受けた印象は異なっていた可能性がある。ラマ教とピーターとの関係が浮上するのは「クランフォードの大パニック」の後半部が掲載された1853年1月15日号のことだが、前半部が掲載されていた1月8日号においては、作品の舞台としてインドが浮上することを予告するかのよう、「クランフォードの大パニック」の前編の直前に“Silk from the Punjaub”という、インドから輸入される絹糸についての記事が掲載され、五ヶ月前にあたる1852年7月24日号には、“The Forbidden Land”という、ラマとの面会を果たすべくチベットを旅行した宣教師の一団についての記事も掲載されているのである。『ハウスホールド・ワーズ』誌を舞台として展開された、ラマ教をめぐる一連の言説空間の一部としてピーターを捉えることで浮上するのは、われわれが想像する以上にラマ教についての情報を当時の読者が持つ

ていた可能性に他ならない。

次に行なうべきは、ギヤスケルの作品が掲載されていた号の周囲の記事から、その作品を位置づける作業であろう。そうした位置づけがもつ意味を最も端的に表わすのが、『クランフォード』を周辺の記事から位置づけるという試みである。第一次世界大戦の塹壕で、イングランドに対するノスタルジアを呼び起こすものとして『クランフォード』が読まれたという *Oxford DNB* の指摘が示唆するように、『クランフォード』はイングランド的なものと強く結びついた世界を描いたものとして位置づけられてきた。こうした解釈を、「クランフォードの恋物語」が掲載されていた 1852 年 1 月 3 日号の『ハウスホールド・ワーズ』誌から裏づけることができるのだ。この記事の周辺に掲載されているのは、植民地をはじめとする海外の出来事をめぐる記事—— インドの神話を扱う “*Pearls from the East*”、あるスコットランド人からの投書という体裁で、かつてのスコットランドの法律を揶揄する “*What I Call Sensible Legislation*”、ニュージーランドの風俗を紹介する “*Going Circuit at the Antipodes*”、ウィーンで行なわれた仮面舞踏会の報告 “*The Roving Englishman: A Masked Ball*”—— であり、「クランフォードの恋物語」がイングランドを象徴する記号として機能するような誌面構成がなされているのである。ディケンズがギヤスケルの作品を読み込んだうえで、作品のもつ要素を記事の構成を通じて補強した一例であろう。

ギヤスケルが『ハウスホールド・ワーズ』誌に寄稿した作品のなかでも特異な位置を占める「呪われた種族」も、雑誌のコンテクストから捉えなおすことが可能である。扱われているのは、ピレネー山脈周辺の村落で暮らす社会から追放された賤民階級 *Cagot* の人々が直面しなければならなかった苦難の歴史であり、それが人類学の論文を彷彿とさせる文体で描かれている。したがって、小説のような明確な作品構成が見られることはないのだが、ここで列挙される虐待の数々—— 家畜の数は制限され、食料の売買は禁じられ、夜間や早朝に街にいることすら許されず、井戸や教会の出入り口も他の人々のものとは別、*Cagot* 女性と外部の人々が結婚することすらタブー視される—— は凄まじいといしか言いようのないものである。

ここで考察しなければならないのは、主題となっている *Cagot* がイングランドではどのような意味を持ちえたかということである。作品が掲載されたのは

1855年なのだが、*OED*の初出が1844年となっていることから、彼らの存在がイングランドで浸透していたとは到底考えられない。したがって、ギヤスケルや編集長ディケンズとしては、*Cagot*を他の何らかの要素との関連で扱おうとしたと考えるべきであろう。このような作品が書かれた背景として、地方史や伝説に対する関心がギヤスケルのなかにあったということは否定できないにせよ、同時に *Cagot* に代表される虐げられた人々への同情と、そのような虐待を黙認した社会に対する憤りがあったのではないだろうか。これを物語るのが、作品の結末である。

We are naturally shocked at discovering, from facts such as these, the causeless rancour with which innocent and industrious people were so recently persecuted. Gentle reader, am I not rightly representing your feelings? If so, perhaps the moral of the history of the accused race may, perhaps, be best conveyed in the words of an epitaph on Mrs. Mary Haud, who lies buried in the churchyard of Stratford-on-Avon

‘What faults you saw in me,  
Pray strive to shun;  
And look at home; there’s  
Something to be done.’ (VII, 80)

墓碑銘の形で提示された “And look at home; there’s / Something to be done.” という箇所から見えてくるのは、読者の視点をイングランド内部の状況へと向けさせようとするギヤスケルの姿勢である。この墓碑銘を通じて、作品冒頭で提示された “We have our prejudices in England. Or, if that assertion offends any of my readers, I will modify it: we have had our prejudices in England [. . .]. But, after all, I do not think we have been so bad as our Continental friends.” (VII, 74) という自己満足すら感じさせる言辞に対して、疑義が突きつけられることになるのだ。

『ハウスホールド・ワーズ』誌のコンテクストからこの作品を改めて眺めると、イングランド内部の状況のみに限定されない可能性をディケンズが示唆していることに気づかされることになる。ディケンズは「呪われた種族」の直後に、アメ

リカ・インディアンによる虐殺からは免れたものの、父親と弟をインディアンに虐殺されるスコットランド移民の兄弟の姿を描いた“The Child-Seer”を掲載した。すなわち、両者を結びつけて捉えるように読者を誘い、その反応を規定しようという試みが行なわれているのだ。子どもの予知能力のおかげで、この直後に起こったより大規模な虐殺から逃れ、親戚を頼ってスコットランドへ帰国するという作品構成は、この作品単独で考えるならば他愛ないものに映るかもしれない。しかし「呪われた種族」と併せて考えることで、双方の作品を〈読者から虐待を受けるものへの同情を引き出す記号〉として解釈し、その主題を前景化させるために、このような構成を採った編集長ディケンズの姿が見えてくるはずである。

#### 4 痕跡をたどって——ギヤスケルとディケンズの新たな関係へ

『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載されたギヤスケルの作品を同誌内のコンテキスト、すなわち全集版からは抜け落ちてしまった記事間の連関性から位置づける作業を通して見えてくるのは、誌面構成を通じて、ある特定の読みを前景化させようと試みる編集長ディケンズの姿である。換言するならば、ディケンズがギヤスケルの提示した主題を読み取り、それが読者に最も伝わりやすい形で伝わるような構成を採っていたということである。そこから浮上してくるのは、当時の読者がどのように作品を捉えたかという、解釈をめぐる可能性であった。ディケンズの解釈に基づいた形で作品が配置され、そのような枠組のもとで読者は作品を読むことを余儀なくされたということは、作家ギヤスケルと編集長ディケンズとの共同作業が『ハウスホールド・ワーズ』誌上で展開されていたと解釈しうるはずである。そうした共同作業の痕跡が全集版の作品にどれだけ残っているのか具体的に論証することは極めて困難ではあるものの、作品に埋め込まれた解釈の方向性のある方向に規定したことは確かであろう。ディケンズが採った誌面構成を基に作品を位置づけなおすことで、作品のなかに残る共同作業の痕跡を辿ることができるはずである。

したがって、Schor が展開した〈ディケンズが体現していた男性的言説に対するアンチテーゼたる女性的言説が展開された作品〉として『クランフォード』を捉える解釈、Gillooly が展開した〈父権制度の体現者として編集長

ディケンズを捉え、ディケンズ的な有機的小説から逸脱するように『クラフフォード』を構築し、女性としての自我を求める戦いを展開した」という解釈は、ギヤスケルとディケンズの共同作業という側面を念頭に置くならば、妥当性を欠くものであると言わざるを得ない。ギヤスケルがディケンズの介入に苛立っていたこと、雑誌に小説を連載することがギヤスケルの志向とは相容れなかったことを強調して、両者の差異を前景化した批評は、両者の共同作業を黙殺している。

ディケンズの試みがまだ書かれていない作品にまで及ぶことがあったことを物語るのが、『ハード・タイムズ』と『北と南』をつなぐ役割を果たした“*It Is Not Generally Known*”という記事である。ディケンズ自身の手によるこの記事は『北と南』の連載開始にあわせて掲載され、『北と南』の序文を意図して書かれたものである。ディケンズはここで資本家スロギンズと労働者ヨブ・スミスを登場させ、『ハード・タイムズ』の主題でもあった功利主義への激しい攻撃を改めて展開する。

Sloggins warmly recommends that all Theatres be shut up for good, all Dancing Rooms pulled down, and all music stopped. Considers that nothing else is people's ruin [. . .]. Consequently, all the five and twenty [. . .] do severally urge that the requirements and deservings of Job Smith be in nowise considered or cared for; that the natural and deeply rooted cravings of mankind be plucked up and trodden out; that Sloggins's gospel be the gospel be the gospel for the conscientious and industrious part of the world; that Sloggins rule the land and rule the waves; and that Britons unto Sloggins ever, ever, ever, shall – be – slaves. (X, 52)

このような言辞を提示したうえで同一号の後半に『北と南』を掲載したということは、『北と南』という新連載小説を、労働者を省みない雇用者への攻撃という観点から読むように読者を誘う試みであったはずである。ディケンズは読者の解釈を規定するこうした記事を挿入し、後の作品の意味をも規定しようとしたのだ。結果的に、ギヤスケルはディケンズよりも雇用者に同情的

な形で労働者との融和を描くことになったが、ディケンズが行なったこうした読みの規定がどこまで影響力を持ったか論証することはできない。しかし、たとえ作品の結末まで影響力を維持することはなくとも、作品を読み始める際に読みの方向性を指し示したことは確かである。

作品を『ハウスホールド・ワーズ』誌のコンテクストから位置づける作業が、あらゆる場合に当てはまるわけではない。しかし、『北と南』の連載が進むにつれて売り上げが落ち、テーマの重さを和らげる意味で、敢えて労働問題が取り上げられなかったという例があるように、ギャスケルの作品の周囲に関連する記事がないことが、より多くの意味や別のレベルの意味を生み出す可能性をもちうることは念頭におかねばなるまい。雑誌の構成という、言辭としては決して表面化することのない要素が作品に残した痕跡を辿りなおすことで、全集版からは失われてしまった、ギャスケルとディケンズのもうひとつの関係が浮上してくるのである。

## 注

本稿は第19回日本ギャスケル協会全国大会（2007年9月30日、於中央大学駿河台記念館）における研究発表「編集長ディケンズが見たギャスケル」に加筆訂正を加えたものである。

- 1 『クランフォード』の構造をめぐることは、様々な議論がなされてきた。Gérin は文学というよりもギャスケルの手紙を彷彿とさせるものとし (124)、Boone は作品の一貫性を作品構造ではなく、むしろ独身女性というテーマに見いだしている (296)。こうした傾向からも、ギャスケルが書いた他の小説の枠組からこの作品を解釈することの難しさが窺えるはずである。
- 2 ディケンズが記事の配置に非常に気を配っていたことは、副編集長であったウィルズに宛てて、ギャスケルの“Company Manners” が掲載された『ハウスホールド・ワーズ』誌の構成について指示した 1854 年 5 月 4 日付の書簡からも窺い知ることができる (*Letters*, VII, 327)。
- 3 編集長ディケンズの介入は様々なレベルに及び、「リジー・リー」に登場する

自身の名前を他の作家のものと差し替えてしまったこともあれば、“The story [“The Heart of John Middleton”] is very clever [. . .] and if it ended happily (which is the whole meaning of it) would have been a great success.” (*Letters*, VI, 231) などと、「ジョン・ミドルトンの心」や「老婆の話」といった作品のプロットの変更を迫ることもあった。章や分冊連載時の分割に積極的にかかわり、「リジー・リー」、「ジョン・ミドルトンの心」、『北と南』——元々ギヤスケルが考えていたのは『マーガレット・ヘイル』というタイトルであり (*Letters*, VII, 378)、後には『死とその変奏』というタイトルを主張していた (*Matus* 35-6) ——、「暗い夜の仕事」といったタイトルを、ディケンズは自らの判断で命名していた (*Letters*, X, 164)。こうした露骨な干渉を踏まえて、自らの権力をギヤスケルに押しつけるディケンズという批評が展開されてきたのである。

#### 引用文献

- Altick, Richard D. *The English Common Reader*. 2nd ed. 1957; Columbus: Ohio UP, 1998.
- Boone, Joseph Allen. *Tradition Counter Tradition: Love and the Form of Fiction*. Chicago: U of Chicago P, 1987.
- Collins, Phillip. *Dickens and Crime*. 3rd. ed. New York: St. Martin's, 1994.
- [Dickens, Charles]. “A Preliminary Word.” *Household Words* 1 (1850).
- [\_\_\_\_]. “It Is Not Generally Known.” *Household Words* 10 (1854).
- \_\_\_\_. *The Letters of Charles Dickens* vol. VI. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis, Oxford: Clarendon P, 1988.
- \_\_\_\_. *The Letters of Charles Dickens* vol. VII. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson and Angus Easson, Oxford: Clarendon, 1993.
- \_\_\_\_. *The Letters of Charles Dickens* vol. X. Ed. Graham Storey; assistant editor, Margaret Brown; consultant, Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon, 1998.
- [\_\_\_\_]. “On Duty with Inspector Field.” *Household Words* 3 (1851).
- [Gaskell, Elizabeth]. “An Accused Race.” *Household Words* 7 (1855).
- [\_\_\_\_]. “The Great Cranford Panic.” *Household Words* 6 (1853).
- [\_\_\_\_]. “Traits and Stories of the Huguenots.” *Household Words* 8 (1853).
- Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography*. Oxford: Clarendon, 1976.

- Gillooly, Eileen. "Humor as Daughterly Defence in *Cranford*." *ELH* 59 (1992).
- Hughes, Linda K. and Michael Lund. *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*. Charlottesville: UP of Virginia, 1999.
- Jaffe, Audrey. "*Cranford* and *Ruth*." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Mathus, Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Jones, Aled. "The Press and the Printed Word." Ed. Chris Williams. *A Companion to Nineteenth-Century Britain*. Oxford: Blackwell, 2004.
- Matus, Jill L. "*Mary Burton* and *North and South*." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Mathus, Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Schor, Hilary M. *Scheherezade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novel*. New York: Oxford UP, 1992.
- [Siddons, Mrs.] "The Burial of the Old Year." *Household Words* 2 (1851)
- Sutherland, John. *The Stanford Companion to Victorian Fiction*. Stanford, California: Stanford UP, 1989.

Abstract

Reading Gaskell's Works  
with Dickens's *Household Words* as Intertext

---

Takumi KATO

---

This article focuses on the way Charles Dickens arranged Elizabeth Gaskell's articles in his journal *Household Words*. In the past, many critics tended to focus on how Dickens interweaved in the composition of Gaskell's novels such as *North and South*, emphasizing the conflict between the patriarchal editor Dickens and the victimised writer Gaskell. However, one has to doubt that contemporary readers who read Gaskell's works in *Household Words* reacted in such a way. Since they had to read her works in connection with the other articles, it is worth considering how Dickens wanted his readers to interpret Gaskell's works in his magazine through examining these intertextual connection.

For that, one must investigate what articles Dickens placed before and after Gaskell's works. For example, there was an article of Gaskell's called "Disappearances," and there appeared another article "On Duty with Inspector Field" just one week after "Disappearances." Since both articles contain praise for the Detective Police, Dickens constructed his journal so that contemporary readers would make a connection between these articles. In addition, since Dickens put an article "The Forbidden Land" dealing with a Lama five months earlier than "The Great Cranford Panic," in which Peter Jenkyns, who is said to be a Lama appears, readers would easily accept that Peter might be a Lama.

In the same way, Dickens placed some loosely connected articles within the same issue. For instance, Dickens arranged articles which are about foreign countries such as "Pearls from the East," and "The Roving Englishman: A Masked Ball" to emphasise English elements in Gaskell's "A Love Affair at Cranford." Moreover, Dickens put "The Child-Seer," which deals with a terrible massacre of a Scottish family by Amerind, just after "An Accursed Race," which narrates the tragic history of Cagot, so that

readers would be moved to sympathy for such victimised people. In this way, Dickens is placing of Gaskell's articles to emphasize some characteristics of her works.

Through these examples, one can see that Dickens tried to foreground and induce certain interpretations by arranging the articles effectively in *Household Words*: Dickens published "It Is Not Generally Known" in the same issue in which Gaskell's novel started to be serialised in order to lead his readers to interpret *North and South* as he read it. Cooperation between Gaskell and Dickens took the form of this intertextual interplay.

